町自連まつえ

平成24年2月1日　発行　　第15号
■発行／松江市町内会・自治会連合会（略称：町自連まつえ）

ごあいさつ

松江市町内会・自治会連合会
会長　佐々木　武　男

新年おめでとうございます。

年頭に当たり皆様のご多幸とご活躍をご祈念申し上げます。

松江市民挙げて取り組んだ五年間の松江開府四〇〇年祭の諸行事も、客年十二月二十五日テルサで開催された「松江開府四〇〇年祭フィナーレ～そして未来へ～」で終了しました。堀尾公以来の先人の偉業をかみしめ、次の一〇〇年へ、しっかりした取り組みができるよう努力して行かねばと思っています。

さて、昨年は、三月十一日の東日本大震災、南紀の大水害、ヨーロッパの金融危機、タイ国の超大水害は、私たちの常識を超える出来事でありました。これらを謙虚に受け止めていかなければと考えます。

昨年八月一日、東出雲町との合併により山陰一の二十一万都市が誕生いたしました。ともに新松江市のまちづくりを進めていきたく期待をいたしています。

市連合会は二十九地区連合会によって組織され、八百九十二単位町内会・自治会とともに地域課題の取り組みや地域活動を行っています。

今、日本の社会構造は大きく変化しています。このようなとき、地域的視点、広域的視点で取り組むことが大切と思っています。地域の課題は何か、地域資源は何か、各種の団体や多くの人々と連携しながら取り組んでいきたく思います。そのためにもより多くの方々に町内会・自治会に加入していただき連帯の輪を広げることが大切であります。

今年一年、皆様のご協力をいただきますようお願いいたします。

松江市長挨拶

松　浦　正　敬

「町自連まつえ」の発行に当たりご挨拶申し上げます。

平素から各町内会・自治会の皆様には、市政の円滑な運営にご協力をいただき、誠にありがとうございます。厚くお礼申し上げます。

さて、あの未曾有の被害をもたらした東日本大震災から一年が過ぎようとしています。改めて、尊い命をなくされた多くの皆様に哀悼の意を表するとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

かけがえのないものを失った大津波を目の当たりにし、多くの方が家族や地域の「絆」や地域で支えあい助け合うことの大切さを感じられたことと思います。

最近は、少子高齢化や核家族化、ライフスタイルや価値観の多様化などにより、地域における近所づきあいなど、人と人とのつながりが希薄化してきています。

しかしながら、防災、子どもの見守り、ゴミの問題など様々な地域課題を解決するためには、行政だけでなく地域での助け合い「共助」が欠かせません。

特に震災などの大きな災害においては、絆の強い地域ほど早く復興すると言われています。

松江市においても、この度の震災を契機に、「安心・安全なまちづくり」を施策の基本とし、自主防災組織への支援などを通じて安心感をもって暮らしていける、暖かいコミュニティを持続させる強い地域づくりを実現していきたいと考えています。

そのためにも、市と市民の皆様がお互いの役割を尊重し、ともに手を携え安心・安全なまちづくりを進めていく必要があります。

今後ともご支援、ご協力を賜りますようお願いいたしますとともに、地域の絆を大切にし、助け合い、支え合う良好な地域社会を築いていただきますよう一層のご尽力をお願い申し上げ、ご挨拶といたします。

今年も様々な課題に取り組んでまいりますのでよろしくお願いいたします。

会長 佐々木武男（雑賀地区）

副会長 小草 通男（持田地区）

副会長 井上 穰（鹿島地区）

副会長 石原 正（白潟地区）

副会長 三島 健治（城西地区）

常任理事 田中美知夫（秋鹿地区）

常任理事 中島 勇夫（本庄地区）

常任理事 山野 健（大野地区）

常任理事 熊谷 和恭（古志原地区）

常任理事 福島 利光（乃木地区）

監事 大野 美雄（城北地区）

監事 石倉 國男（津田地区）

理事 後藤 睆一（竹矢地区）

理事 佐々木省二（城東地区）

理事 福田 安信（生馬地区）

理事 寺本 修己（美保関地区）

理事 松本 光弘（朝日地区）

理事 高井 昇（島根地区）

理事 勝部 廣三（玉湯地区）

理事 久保田明雄（川津地区）

理事 多久和耕吉（大庭地区）

理事 松浦 久義（忌部地区）

理事 石倉 憲昭（八雲地区）

理事 曳野 美行（古江地区）

理事 小数賀安富（法吉地区）

理事 吉岡 敏則（朝酌地区）

理事 池田 均（八束地区）

理事 吉岡 誠一（宍道地区）

理事 松浦 正明（東出雲地区）

活動紹介

まちづくりの原点を学ぶ

～視察研修報告～

早朝の松江駅南口は観光バスでごった返していた。

四台目に並んだ「松江市町内会・自治会連合会」のバスに漸く乗り込み、七時二十分、一泊二日の旅が始まった。

二十八人の参加者を乗せたバスは米子道、中国道を順調に走り、予定より少し早く第一の目的地である京都府南丹市美山支所に到着した。

迎えに出ておられた産業振興係の中野主査に案内された会議室で、直ぐに町の概要説明が始まった。

南丹市美山支所

昭和五十三年の第一期村おこし（農林業の振興）、第二期（都市との交流）、第三期（新産業おこし）、そして平成十三年の第四期（住民主導の町づくり）を一応の締めくくりとした二十数年にわたる地域住民と行政の共同作業による町おこしの奮闘の歴史を伺った。

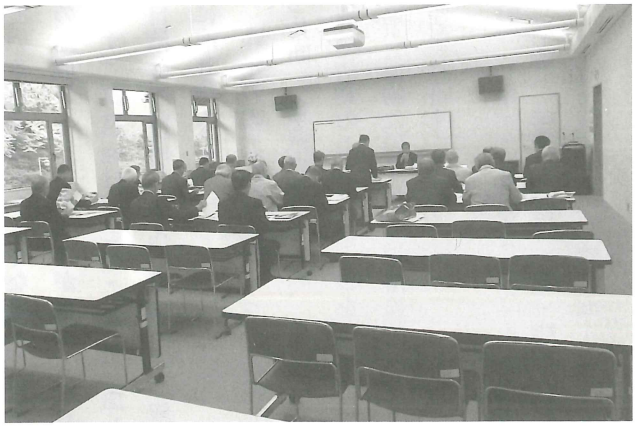
美山町は、その名の通り美しい山々に囲まれ、山間を流れる由良川に沿うように五十七の集落が点在し、二百棟のかやぶき家屋が残る自然美豊かな町である。その中でも北集落は雛壇上の傾斜地に五十戸弱の「北山型入母屋造り」のかやぶき家屋が整然と集まり、美しい景観を見せている。平成五年に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され「かやぶきの里」と呼ばれ年間七十万の観光客が訪れている。平日のその日も我々とは別の一畑観光を含め十数台の観光バスが駐車場を埋め、多くの観光客で賑わっていた。

支所での説明の後、バスで現地に移動し「かやぶきの里」を散策する中で案内役の中野主査の住居がその一隅にあることは印象的であった。

美山町視察

翌日は、島根の温泉津（ゆのつ）と共に、全国難読地名の一つ兵庫県豊岡市出石（いずし）町訪問であった。案内役の観光協会の加藤氏は地域おこしに情熱を燃やす熱血漢であり、内容のある説明と歯切れのよい口調には説得力があった。

但馬の小京都といわれる出石は、今もなお城下町の風情を残し、平成十九年に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されている。そのまちづくりは、平成三年頃に始まり、「出石城下町を活かす会」を基盤に「女性たちのまちづくり会議」などさまざまな町民グループが活動している。



豊岡市出石総合支所

町のシンボルである辰鼓楼（しんころう）、別名太鼓やぐらは、現在も時計台として町民に親しまれているが、町民が景観保持のために、その高さ十九、六米以上の建物を建てないことを自主的に決めたという意識の高さと結束力には感動を覚えた。

両地区で共通に感じたのは、情熱的な先導者と住民の意思統一、それこそ官民一体となった改革への意欲の素晴らしさであった。

案内された美山かやぶきの里の路地

出石町視察

で見かけた住民のための「移動販売車」、そして出石の狭い観光散策路を走る車や自転車に、親しみのある生活の匂いが感じられた。

このような住民生活と共存する観光地がこれからの地域おこしの基点の一つであることを学んだような気がする。

両地区で頂いた貴重な示唆、豊富な資料、特産品のおみやげの重さを、心と両手に感じながら、生野銀山の坑道を経由して帰路に着いた。

〈視察研修プロジェクトメンバー〉

石原　正・田中美知夫・中島勇夫

熊谷和恭・寺本修己

三団体合同研修会について

毎年実施されている地区社会福祉協議会会長会、公民館長会、町内会・自治会連合会の三団体合同研修会が八月二十六日にサンラポーむらくもで開催されましたので紹介します。

この研修会は、三団体が合同で研修することにより、地域力を高め、豊かな地域づくりに資することを目的に開催されており、今年度で四回目となります。

今年度は、講師として内閣府の地域活性化伝道師である立教大学観光学部特任教授の清水愼一氏を迎え「観光とまちづくり」の演題で講演をしていただきました。

観光には人と人とのふれあいが大切であり、地元の人との交流や体験を取り入れることでリピーターを増やした成功例の紹介や、昨今「まち歩き」観光が人気であり、観光客は日常生活から離れたところの「まち歩き」で新たな感動や発見を楽しんでいることの説明がありました。

観光客に人気のまちとは、①歴史や文化を大事にするまち、②歩いて心地よく楽しめるまち、③市民が観光を楽しむまち、④市民と触れ合う仕掛けがあるまちであり、そのためには、①まちの宝探しをする、②まちを歩いてみる、③子どもに昔話を聞きとらせるなどにより、地域住民が主役となって、感動を与える魅力あるまちづくりを進めることが大切であるとの話を聞きました。観光都市松江として、市民みんなで観光の推進に取り組んでいる私たちには、共感するところも多く、大変参考になりました。

また、現在市民参加で進められている各地区の「わがまち自慢発掘プロジェクト」による「お宝」探しや「まち歩きマップ」の作成。作成した「まち歩きマップ」による地区住民参加のウォーキングの実施などの事業は、観光の推進に有効な手段であるとの確信を得ました。

〈事業担当者〉

三島健治・福島利光

編集後記

合併により市域が拡がって、町自連は二十九の地区連合会で組織する大きな市民活動団体になりました。地区連合会には約九百の自治会が加入しています。

〝土地〟と〝住民〟の存在で成り立っている自治体が大きくなると、自治会の地域コミュニティーが重要といわれます。町自連は、このことを認識し、自治会の活動を支え、地域課題の解決に取り組みます。

昨年の震災を機に深まった〝絆〟と〝共助〟意識の高まりが、これからの地域活動の力となることを願い、町自連の活動に対するご理解に感謝して本号をお届けします。

〈編　集〉「町自連まつえ」広報担当者
小草　通男・山野　健・熊谷　和恭
町自連事務局　☎五五―五一六九
（松江市市民生活相談課内）